

壁にぶち当たる。それを乗り越える。
人はそれを繰り返して成長していくのだろうか。
乗り越えた壁の向こうに何が見えるのか。
目の前の壁にどう挑むべきなのか。
壁を乗り越え、何かを手に入れた
その人が語る、ブレイクスルーの瞬間とは。

多田 琢

CM
プランナー

T a k u

T a d a



誰よりも何よりも「好き」という力がお茶の間に届く

自分らしく生きたい、好きなことで食べていきたいと誰もが願う。
しかしそれができないのが人生だ、と諦める人がほとんどだろう。
好きなことで生きるために必要なのは、好きという力で困難を乗り越える勇気。
抱腹絶倒のCMを生み出すクリエイターは、それを才能と呼んだ。

Text: Akira Yokota Photograph: Yukio Yoshinari

誰もが知っているあのCMの 作り手の修行時代は営業マン

テレビを見ていて、面白いコマーシャルに吹き出したことはないだろうか。手前ミソながら弊社のパソコン、FMVシリーズもその一例に挙げさせていただこう。SMAPの木村拓哉さんと岸部一徳さんの珍妙なやりとりは、おかげさまで好評を得て、長いシリーズになっている。

「よくまあこんなに妙なことをたくさん考えられるな」と感心していただければ本望。

「これはこれで大変だろうなあ」と思われた方もおられるかもしれない。それを考えるのがCMプランナー。広告のコピーやストーリーを作る仕事だ。

FMVシリーズのほかにも、もちろん面白いCMは数多い。小便小僧が身体によぶんな成分をピロピロと出しながら掛け合いをする健康飲料。酒の席で「オレならガツンと言っちゃうよ」と意気だったサラリーマンが、気がつくとクリントン大統領の前に座らされ、「それではガツンと言いたまえ」と迫られて困る缶コーヒー。宇宙人が合コ

ンの前に地球で軍資金を調達する消費者金融に、風呂場に突然現れた謎の男が水鉄砲を片手に、か弱そうな若者を脅すカラープリンター……。じつはこれらはすべて同一人物の作品。多田琢さんの仕事なのである。

大手広告代理店、電通出身の多田さんは99年に当時の仲間たちと独立し、「TUGBOAT」というクリエイティブ・エージェンシーを立ち上げた。ちょうど前出の缶コーヒーのCMのころだ。これだけの実力派だけにそれも当然、ではあるのだが、意外なことにすでに40歳の彼のクリエイティブ生活はまだ10年を越えたばかり。電通でのサラリーマン生活のスタートは、営業局だったのだ。

「大学を出て就職する時は、じつはマスコミならどこでも良かったんです。むしろ広告畑が一番縁が薄かったかもしれない」と多田さんは当時を振り返る。それというのも、「本心では、映画を作っている人がいちばん羨ましかった。でも、映画は自分の能力じゃ食えない、と思ったんです。黒澤明さんやビートたけしさんの才能は、自分にはないと思った」

そこでマスコミを志望し、受かった中から電通を選んだのは「好きなことができそうだったから」。ずいぶん羨ましい話だが、それも実力である。ただし、彼はせっかく採用されたクリエイティブ局ではな

く、営業局への配属を希望する。

「(TUGBOATの)岡を始めとして、クリエイティブ局で活躍している人の中には営業局から転局した人が多いと知って、それならオレも、と思ったんです」というところが。

「営業局での仕事は死にそうなほどつらくて、毎日いつやめようかと思ってきましたね」な日々。じつは電通社員のモーレツぶりは、業界ではよく知られている。毎日早朝から深夜まで重い荷物を抱えて得意先回り。しかも、当時の多田さんは学生気分が抜けず、社内ではいつも怒られまくっていたという。「オレも若いころはそうだった」という方も多いのではなからうか。

面白いかどうかの基準は 自分の中に作るしかない

それでも、つらい営業局での仕事は、のちの多田さんのクリエイティブワークのためにも大きな力となった。

「クライアント(広告主)の生の声を聞けるのは、クリエイターではなく、営業の人間なんです。クリエイターには『もうひとつ、案を考えてみてください』と言葉を選ぶクライアントも、営業には『全然ツマンナイよ』と本音をぶつける。逆にクライアントがイメージを伝えるオリエンテーションではどんな説明をしようとも、じつは面白ければOKなんだ、といったことも分かった。そんな風に広告の裏側を客観的に見られたのが勉強になったんです」という。

人生においてはどんな経験も、けっしてただの回り道ではない。いにしえからの箴言^{しんげん}は、多田さんにとってもまさに当てはまったのである。

そうして雌伏すること数年。多田さんは満を持して転局試験を受ける。が、一次は作文、二次で広告の実作という試験に、見事に落ちてしまう。それで終われば、のちに世間の話題を呼ぶ実力は、埋もれたままで腐っていたかもしれない。

「もう一度試験を受けるかどうか、ずいぶん迷いましたよ。二度も落ちたら『クリエイティブ能力がない』と言われて、今度こそ這い上がれませんからね。諦めて一生営業局にしようかとも考えました」という



富士ゼロックス DocuCentre Color f450
同時に行ける男篇



JR東日本 JR-SKI
RE BORN~SKI HERO篇~



多田さん原案・脚本
「SURVIVE STYLE5」のワンシーン。
製作:電通 東北新社 日本テレビ TUGBOAT
配給:東宝 企画・原案・脚本:多田琢 監督:
関口現 出演:浅野忠信 橋本麗香 小泉今日
子 阿部寛 岸部一徳 麻生祐未 津田寛治 森
下能幸 JAI WEST 荒川良々 VINNIE
JONES 三浦友和(特別出演) 千葉真一
2004年 9月公開

PROFILE

多田 琢

1963年生まれ。CMプランナー。早稲田大学第一文学部卒業後、電通に入社。99年に岡康道氏らとTUGBOATを設立。96年からTCC(Tokyo Copywriters Club)賞、ACC(社団法人全日本シーエム放送連盟)賞、ADC(Tokyo Art Directors Club)賞、ギャラクシー賞、ニューヨーク・フェスティバル金賞など、広告界の主要な賞を数々受賞。今年秋には初めて脚本を手がけた映画「SURVIVE STYLE5」が公開される。





多田さんが制作している当社のCM裏話をご覧になれます。
<http://www.fmvworld.net/fmv/>で
 『FMV CF Side B STORY』ボタンをクリックしてください。

言葉には、おそらくサラリーマンなら誰でも共感できるだろう。

しかし、彼はリスクを取った。再挑戦で念願かなってクリエイティブの世界にデビューするのは30歳。遅咲きのスタートである。

ところが、それで押しとどめていた才能が満開、というわけにはいかなかった。

「クリエイティブ局に移っても、なかなかいい企画ができなかったんです」というのだ。一生懸命考えた企画が通らない。生え抜きのプランナーが活躍するのを横目に、当時の多田さんが悩まなかったはずはない。

ところが、ある日上司から言われる。

「これ、自分で面白いと思ってる?」と。

上司やディレクターが面白いと思えば、そんな企画しか出せないでいる自分にそれで気づいた、と多田さんは言う。

「それまで、自分が作ったものは個人的な趣味だと思っていたんです。でも、そんなものにも反応があることに気づいた。『多数決より個人の熱意が求心力になるんだ』と分かったんです」

要するに、自分が面白いと思ったものがゴール。そう思えるようになるまで、1年を要したという。

「企画は無尽蔵にある。でも、その中でどれをいいとして、どれを悪いとするか。その基準は自分でしかないんです。『これでいいんだ』と思える基準を自分の中で作れないと」

基準は自分。そう言える職業人は幸せだ。しかし、クリエイティブワークとは、その幸せな基準を苦勞しながら確立することなのだろう。そうして“開眼”した多田さんのアイデアは、いよいよお茶の間で踊ります。

小さなカメラを向けられてポーズを決めたペンギンが、ビデオであることに気づいてあわてて踊るCM、電車の中でSMAPの稲垣吾郎さんと全身銀色の乗客が、突然歌い踊りだすレンズ付きフィルム、木村拓哉さんが悪漢を蹴散らして歌い、踊る中央競馬。

旅客機の機長とスチュワーデスを新幹線に乗り換えさせたり、日本へのエンターテインメント輸出を熱弁する大統領候補のシワちゃんを、木箱で日本に送り込んだりもした。大爆発した才能は、またたくまに広告関係の権威ある賞を総なめにする実力を発揮したのである。

好きだからこそ実現までの困難も乗り越えられるんだ

「アイデアあって、ホイップクリームと同じなんです」と多田さんは言った。

「ホイップクリームって、最初は液体なのが、グルグルかき回しているうちに、ある瞬間に固まりになるんです。その感じで、いつも何かを

考えながら、何気なく雑誌なんかを見てるとき、天から降ってきた感じでポンッと形が見える。ときには依頼されてもない商品のアイデアが『こんなストーリーでこうやったら面白い』なんて湧いてきて、売り込みに行ったりするんです」という。

それがつまり才能ということなのだろう。

「お話を考えているのが好きなんです。やめると言われてもやめられない。どれだけ好きか、ということが才能なら、それが才能かもしれません」というそのバックボーンは、少年時代からの本好き。じつは父上は装幀家で、多くの本に囲まれて育った。とくにファンタジーが好きだったという。

「ハリリー・ポッターに出てくる Hogwarts 魔法学校が本当にあったら、絶対に行きたい!」と、少年そのものの笑顔を見せる。その純真な心が、ダチョウにスキーをさせるアイデアを生むのだ。

そんな多田さんの生き方を、嫉妬する向きもあるかもしれない。「好きなことをやって、面白がって生きていければ苦勞はないよ」と。そうだろうか。たしかに、誰もが好きなことをしながら生きられるわけではない。しかし、多田さんはきちんとそのためのリスクを背負ってきた。転局試験の失敗、自分の基準が確立されるまでの迷い、そして独立。せつかくのアイデアが通らず、涙を呑むことだって、もちろん今なおある。

「面白い企画が通るためには、それを採用するクライアントのセンスや勇気も大事なんです」という出会いも必要だろう。しかし、そのひとつひとつの瞬間に、ブレイクスルーがある。ホイップクリームが固まるように、無心にかき回すこと。かき回し続けること。それが苦にならないほど好きかどうか、なのだ。

じつは今、多田さんはもうひとつの念願のブレイクスルーを果たそうとしている。この秋に、初めての原作・脚本による映画が公開を控えているのだ。「FMVではヘンテコな役の多い岸部一徳さんにも、今度はいいい役をやってもらいましたよ」という多田ワールドだ。ほかにも作詞、ミュージッククリップの制作など、CM以外の仕事も数多く手がける。

好きなことを実現するには、好きの力で困難の壁を乗り越えるしかない。ガツンと言って、真剣勝負。その結果は自分持ち。じつはこれほどのヒットメーカーである多田さんにも、クレームによるCM打ち切りといった失敗もあることを知れば、それを納得していただけるだろうか。

「新作が世の中に出る前から、成功の確証があるわけじゃありません。FMVのシリーズだって、『これだけ続くんだから面白いんだろうな』と思うだけ。自分にウソをつかず、面白いと思ったものが通るまで出し続けるしかないですよ」と語る多田さんは、おそらく世間一般がCMから想像するより、はるかにノーマルな大人である。